

葉山の花取踊 次世代へ

「残すため変える」地区超え協力



よさこい高知
文化祭2026

開幕まで10日となった国民文化祭「よさこい高知文化祭2026」では、中山間地域で存続の危機にある伝統芸能の再興・継承が大きなテーマとなっている。津野町では、担い手の小中学生が減っている県指定無形民俗文化財「葉山の花取踊」で、今年初めて地区外の子どもにも参加を呼びかけた。伝統を変える決断をし、継承の道を探っている。

(一面参照)

ヤマドリの毛で飾った頭をかぶり、手には太刀、小太刀。紅をさした踊り子が歌や太鼓に合わせて舞う。秋、神社の境内は、地区の「師匠」と練習を重ねてきた子どもたちの晴れ舞台になる。

葉山の花取踊は現在、新土居、姫野々、白石の3地区が伝承している。3年間ずつ順に、三嶋神社の大祭などで奉納しており、歌や踊りは地区で異なる。舞い手と太鼓を担うのは、地区の小中学生18人。09年までは4地区で回っており、当番が回ってくるま

津野町「人口減にあらがいたい」

での年空いていた。今年から当番となる姫野々の保存会のは子どもが多くて踊れん子が池野利彦さん68は「昔に年いっぱいおったと振り返る。

■変容の危機

少子化が進む同町では、10年3月に白石小が閉校。統合先の精華小も24年3月に閉校。葉山地域の小学校は葉山小のみに残った。白石地区の花取踊は室町時代の歌謡を伝え、県内の太刀踊りの古い姿を残すが、地区内の子どもの増加が見込めず、22年の奉納を「最後」とした。23、25年

に受け持った新土居地区は、他地区からの協力を得てとうに12人を集めて奉納した。県は19、21年度、花取踊など継承の危機にある民俗芸能の緊急調査を実施。38件が中断や存続の危機にあった。葉山の花取踊は「変容の危機にある」とされ、24年に国から「記録作成などの措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選ばれた。昨年からは有識者6人が地域に入り、調査を続けている。

県立大学地域共生学研究所構の高徳希准教授(44)は「スポーツ科学」は人の動きをデータ化する「モーションキャプチャー」を使い、昨年は新土居と白石の踊りを記録。今年

は姫野々の練習の撮影に通う。「データだけでなく、地域の人の言葉を合わせて残す。踊った子どもが帰ってきて、師匠として伝承しようという時の助けになれば」と話す。

■町の子の宝に

姫野々の保存会は今年、地区の枠を超えて葉山小の児童全員から舞い手を募った。池野さんは「残すために伝統を変える一大決心だった」と話す。学校も協力し、21人が手を挙げた。

児童たちは「夜も友達とおれる」「きれいな衣装が着たい」などと、20日からの練習を心待ちにする。3年生の片岡守さん(8)は「最後は仲良くなつちゅうと思ってる」「打ち上げをしたい」と笑う。22年に地区の子もただの奉納が最後となった白石地区では昨秋、調査のために大きくなった踊り子が集まり、花取踊を披露した。3年後、再び番が回ってくる。師匠の岡田正幸さん(69)は「姫野々で地区外から応募があったことは希望に感じる。何とか続けたい」。葉山小とは約10キロ離れており、練習の負担などの懸念もあるが、師匠仲間の平井尊さん(71)も「人は減り続けて厳しくなることは分かちゅうがよ。けど、あらがいたいわね」と話す。

町の田中勝幸学委員(49)は「昔は地区に生まれた子しかでさん普れやった。ちよつと伝統が変わるかもしれんけど、葉山の子、津野町の子として自慢できる、一生の宝になつてほしい」と願う。

■11月「芸能まつり」

町はよさこい高知文化祭の一環として、11月7日に「町伝統芸能まつり」を開く。伝統芸能に関心を持つという、裾野が広がれば、町の全小中学生を招待し、花取踊のほか、旧東津野村の「津野山古式神楽」など、町内各地に伝わる民俗芸能を披露する予定にしている。

(蒲原明佳)



調査では地区によって異なる踊りをデジタル化して残す試みも行われている
(高知市水国寺町の県立大学)